

新春恒例、一月十七日の日本記者クラブ新年互礼会は奇しくも湾岸戦争ぼっ発の日。全世界が米テレビのバグダッド放送で戦争の開始を知ら

91年度クラブ賞に十人が応募

湾岸 開戦日 新年互礼会

されただけに、メディア戦争の名を欲しいままにしております。プレス的重要性をいやが応でも認識させられた半面、互礼会にワーキングプレスの参加者が減ったことはやむを得ないことでした。

一、二の会員から「延期するのだらう」「中止した方が良い」といった声がありましたが、すでに長い間準備してきた会です。決して対岸の火とは思っていませんが、いまだに延期することでもできず、予定どおり実施いたしました。

お楽しみ予想アンケートは、全十問正解はさすがにありませんでしたが、七人の方が九問的中、中でも島崎会員（読売）が二年連続で表彰

されたのはお見事です。予知能力に優れているのか、カンが鋭いのか、ちなみに小生は五点。平均点は五・三点でした。

本年度の日本記者クラブ賞の推薦が一月三十一日で締め切られました

た。出そろった候補者は十人。最近では数が多い方で、いずれも推薦を受けた人けるに足る立派な業績を残された人ばかり。二月十八日に推薦委員会が行われますが、激論が繰り広げられることは必至です。四月五日の選考委員会に次いで、同月十九日の理事会で決定されるはこびとなります。

一月のクラブ行事は、七日の鈴木淑夫野村総研副理事長を皮切りに、新春を飾る九一年経済見通しを四氏にやっていただいたのをはじめ、二十八日の平岩外四経団連会長昼食会まで十一人のゲストをお呼びし、にぎやかな幕開けとなりました。

灣岸の陰に隠れるように進められたバルト諸国に対するソ連軍部の実

力行使の最中、二十三日には改革派ジャーナリストのコロティッチ・アカニョーク誌編集長が会見、軍産複合体が巻き返すソ連の現状を鋭い視点で解説してくれました。アネクトで有名なア誌の編集長らしく、ユーモアたっぷりの話の裏に、「私の父は幸せではなかった。しかし私はここでみなさんと一緒にいられるだけ幸福だ」と思わず目頭が熱くなるような話も。

二十八日午前は、新宿の新都庁舎見学会。都知事選に重大な影響を与える「タックス・タワー」と酷評される都内最高層ビル。希望者が殺到することが予想されたため、都庁側に希望者全員の見学を許してもらいたいと再三にわたって申し込みました。しかし、引越し準備中を理由に「一回限り、五十人限度」を譲らず、当方も腹をたてていったんは止めることも考えましたが、一部の会員でも見てもらった方がよいと行うことにしました。このため特にはがきで申し込んでもらい、厳正公平に抽選をさせて頂きました。

(事務局長 白木 東洋)

第252号
1991年
(平成3年)
2月10日発行

東京都千代田区幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 電話 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 三五〇三一二七二(代)

話のおきとって

サイゴンのお巡りさん

友田 錫



三十日の夜、休

戦で夜間外出禁止

が解除になってい

たのをさいわい

に、わたしは親し

い某社の特派員の

アパートでおそく

までだべりこみ、

自分の支局兼アパ

ートに帰ったのは午前一時をまわ

っていた。ひとねむりしたと思っ

てもなく、玄関の呼び鈴がけたた

ましく鳴った。腕時計をみると、

もう午前七時をまわっていた。

眠い目をこすりながらドアをあ

けると、隣に住む若いお巡りさん

が、パンツ一枚の姿で立ってい

た。年のころ二十歳台のなかば、

交通巡査をしていた。ひょろりと

したやさ男で、おとなしい感じの

人の好きそうな若者だった。

「きょう、テトの休み。あな

た、仕事するか」

ゆっくりと一言、一言区切りな

がら、片言のフランス語でわたし

に尋ねた。まず、休日なのに仕事

をするかと切りだしたところが、

何ともいえずおかしかった。

「なにかあれば仕事をするさ」

げげんな思いで答えると、彼は

やや表情をひきしめて続けた。

「ベトナム、バンカーの家、ア

タック、アタック」

バンカーとは、当時の南ベトナム

駐在のアメリカ大使、エルズワ

ース・バンカーのことだ。このお

巡りさんは、ベトナムこと解放戦

線のゲリラが、アメリカの大使公

邸だか大使館だかを攻撃中だ、と

教えてくれているのだ。一瞬、わ

たしの顔から血がさあつと退いて

いくのがわかった。こうしてわた

しにとっての「テト攻勢」ははじ

まった。

事件の第一報をできるだけ早く

知ることには、新聞記者にとって死

活の大事である。恥ずかしながら

ぐっすり眠りほうけていたわたし

に、テト攻勢の第一報を入れてく

れたのは、まさにこの若いお巡り

さんだった。

しかもそれまで、わたしと彼は

まともに口をきいたこともなかつ

た。彼は英語もフランス語もほと

これは、とっておき、というほ

ど大げさなものではない。ベトナム

戦争中のサイゴンで、あるベト

ナム人の男が発したほんの二言か

三言かのことばと、そのときの彼

の姿かっこうが妙に忘れられな

い、というだけの話である。だが

わたし個人にとっては、このわず

かなことばと表情は、暗証番号の

ような働きをもっている。なにか

の拍子に思い出すと、ベトナム戦

争のハイライトのひとつ、あのテ

ト攻勢の情景の数々が、押し寄せ

る波のようにどっと脳裏にのみが

えってくるのだ。

ベトナムでは正月といえど旧正

月をさし、「テト」とよんで盛大に

お祝いをする。一九六八年は一月

三十日が「テト」の元旦にあたっ

ていた。南ベトナム政府軍と米

軍、対する共産側の戦闘部隊は、

恒例にしたがって二十九日からテ

トの休戦に入っていた。ただ北部

の二省で激戦が止まず、休戦から

除外されていたのが、後で思えば

不吉な兆候だった。

首都のサイゴンは花に埋まり、

着飾った人であふれていた。通り

は夜おそくまで、爆竹の爆ぜる音

でみちていた。ところが翌三十一

日の未明、この爆竹の音が突然銃

声に変わった。共産側がサイゴン

をはじめ、南ベトナム全土の主要

都市と基地に一斉攻撃をかけた、

いわゆるテト（旧正月）攻勢の幕

開けである。



ホーチミン市・中国人街ショロンの市場。品物は豊富で、足の踏み場もないほどの活況だった(1990.12 筆者撮影)

んどできないし、わたしもベトナム語がどうしても苦手だった。すれちがえば、にっこり笑って「チヤオ・オン」(こんにちは)ぐらいのあいさつはするのだが、後がつづかない。それでも、こちらに悪い感情をもっていないことは分かっていた。

このお巡りさんには、同じ年かっこの愛くるしい奥さんがいて、建物の掃除を引き受けてい

た。ふたりは子たくさんだった。

乳飲み子もいて、たしか四人はいたと思う。わが支局兼アパートの隣に住んでいるのだが、そこはもともこの建物の物置だったところ、一間しかない。この頃のサイゴンでは、警官の給料は吹けば飛ぶような安さだったから、ゼいたくはいえなかったのだろう。夜はその一間に、一家六人が折り重なるようにして寝るのだった。

わが支局兼アパートのお手伝いさんは、五十をすぎた華僑のおばさんだったが、どうやらこのお巡りさん一家に好感を寄せていたらしい。食事のときには必ずよけにつくって、この一家にわけていた。彼、お巡りさんがテト攻勢の第一報を教えてくれたのも、もしかすると日ごろの「一飯」に恩義を感じてのことだったのかもしれない。

あれから二十三年になる。この間ベトナムの運命は大きく変わった。

五年前、いまはホーチミン市と名を変えたサイゴンを、たまたま訪ねる機会があった。わたしは早速、かつての支局兼アパートをのぞいてみた。見知らぬ住人が中から出てきて、外国人のわたしにいぶかしそうな視線を投げた。隣の、かつてのお巡りさん一家の住みかは、がらんとした納屋に戻っていた。人の住む気配はまったく感じられなかった。

このお巡りさんは、いうなれば旧サイゴン政権の「走狗」であった。その彼が、新政権になって優遇されているとは思えない。新経済区という名の開拓地に追いやられたか、再教育キャンプに入れられたか。街も、シャッターをおろした無人の店が目立ち、通りは閑散としてベトナム戦争中の喧騒が信じられなかった。

そして昨年十二月、またまた縁あってこの街を訪ねた。

この五年間に、ベトナムは再び変貌していた。経済の自由化路線の結果、サイゴンの街は闇商品で埋まっていた。通りにはこれまた

むかしと同じく、イワシの大量の群のようにバイクが群れ、日が暮れると、キャパレーとレストランのネオンがあやしく通りを照らす。そして……物乞いと、年端もゆかぬ子どもの物売りのあふれているさまも、戦争中と同じだった。一挙に二十年むかしにタイムスリッブしたのが、とわが目を疑った。

こんどは時間がなくて、お巡りさんのかつての住みかには寄れなかった。もちろんその姿も見かけなかった。一見むかしに戻ったかのように見えたサイゴンだが、実はこの間、いくつもの大変動がこの住民の運命を翻弄したのだった。その現実が、往年ながらの繁盛と喧騒と貧困の背後に、亡霊のようにすくえて見える気がした。

ともし せき会員 一九三五年生まれ
東京都出身 早稲田大学卒 六二年産経新聞入社 サイゴン特派員 バリ支局長 外信部長 編集局次長 論説委員などを務め 八八年退社 現在 山陽学園短期大学教授 著書に「裏切られたベトナム革命」「入門・現代日本外交」「フランスの新しい風」ほか

一月十七日(水)午後六時から、プレスセンターホール(十階)で恒例の新年互礼会員懇親会が開かれました。この日は米テレビニュースが湾岸戦争の開始を伝え、朝からKデー一色。水上健也理事長も「湾岸戦争が始まった日に互礼会を開くことになったが、まさに今年を象徴してい



新年互礼会

るようだ。現場の諸君が忙しくて参加できないのは残念だが、今年も力を合わせてクラブを育てましょう」とあいさつ。全員が乾杯しました。出席者は三百五十三人。

最高得点者は七人

昨年の「予想アンケート」には四百四十四人から回答が寄せられまし



表彰される最高得点者。左から米、島、泉、富重、高井、山口、後藤の各会員

士」となりました。「早すぎる」と読んだのか、約七割が「マッタ」をかけて間違いました。

集計の結果、左記の七人が九問正解で最高得点を獲得されました。

島 脩 会員 読売新聞論説委員長
米 忠一 会員 時事通信専務取締役
山口和子 会員 水産経済新聞代表取締役会長
高井正憲 会員

た。各問題の正解と正解率は左ページの通りです。何といっても注目目はゴルバチョフ大統領のノーベル平和賞受賞の問題。一昨年からソ連・東欧をおおった、民主化の波を受けての問題でしたが、七割強の方が間違い、出題した企画委員会に「軍配」があがりました。また、大相撲・花田兄弟は十一月の九州場所、史上初の「十代同時幕内兄弟力

全国朝日放送アナウンス部副部長
泉 毅一 会員
個人D (全国朝日放送出身)

富重静雄 会員
個人D (全国朝日放送出身)

後藤忠良 会員 国際PR取締役
出題担当の企画委員会を代表して平野裕委員長が表彰状と記念品(木製万年筆)を贈りました。

中でも島会員は昨年に続いて二度目の受賞。思わぬ(?)受賞に「希望的観測を中心に投票しました。元来くじ運は悪いんだけどなあ」と。また、富重会員はすでに第八回で全問不正解の「特別賞」を獲得(?)しており、初の二冠に輝き「ずっと狙ってたんです。本当にうれしい」とニコニコ。

他の方々からは次のようなコメントをいただきました。

米「編集を離れて七年。遠くからながめているので当たったのかも」
山口「七問日は希望を込めて、間違えました」
高井「今回が初めての挑戦だったんです。それが最高点とは」
泉「まったくのまぐれ。でも、こいつは春から縁起がいいね」



白木事務局長からカメラを受けとる宮崎会員

後藤「ただ、ただ、おどろきました。今年もねらってみようかな」
 なお、今年も全問不正解の「特別賞」はありませんでした。
 さて、今年の投票はすでに締め切りましたが、郵送での投票を含め、四百二十六人から回答が寄せられています。結果は来年のお楽しみです。
 百八社が景品を提供
 もうひとつのお楽しみ、「窄くじ」なしの「福引」には百八の会員社から、今年も多彩な景品が寄せられました。



スプラント会員は高級ブレンダーを引きあてました

ラッキー番号を引き当てたのは、次の方々です。
 △よく伝染るんで賞▽
 カメラ 楓 元夫会員
 (個人D 中日新聞出身)
 〃 宮崎吉政会員
 (個人D 読売新聞出身)
 △夫婦仲良く賞▽
 旅行カバン 弥富朝彦会員
 (個人D ニッポン放送出身)
 豪華食事券 小藤哲郎会員
 (個人D 毎日新聞出身)
 高級ブレンダー
 パトリック・スプラント会員
 (英国大使館一等書記官)



今年も400人以上の会員から回答が寄せられました

△綺麗で賞▽
 豪華美術本 黒沢洋一会員
 (個人D サンテレビ出身)
 △よく書けるで賞▽
 高級万年筆 歌代俊哉会員
 (読売新聞新聞監査委員)
 この他にも、地方色豊かな名産品や特産品がたくさん。出口では、引き当てた景品を手にして、重さを計ったり、振って音を確かめたり、お互いの品を比べたり、にぎやかな光景が見られました。

第18回「予想アンケート」の結果 (1990年1月18日実施 応募総数 444人)

質問	正解	正解率(%)
1. 総選挙で自民党は開票時において公認候補で過半数を獲得するか	正す	53.8
2. 90年12月末まで海部政権は存続するか	正す	48.2
3. 6月以降も好況は持続し岩戸景気を上回るか	上回る	76.8
4. 米国はまた日本に対してスーパー 301 条を発動するか	しない	67.1
5. ゴルバチョフ議長はノーベル平和賞を受賞するか	正す	27.0
6. 朝鮮民主主義人民共和国の国家主席は金正日氏から金正日氏に交代するか	しない	80.2
7. 皇太子殿下の婚約が正式発表されるか	されない	45.3
8. 「国際花と緑の博覧会」の入場者数は2,000万人を超えるか	超える	61.3
9. 11月8日(立冬)の東京都心の最低気温が15度C以上になるか	なる	38.7
10. 大相撲の花田兄弟は幕内力士として同じ場所の土俵に上がるか	あがる	33.8

湾岸戦争

ワーキングプレス

頭の上の電話が鳴った。受話器をあげながら時計を見る。毛布にくるまって横になったのは、ほんの一時間ほど前だった。

「始まった」

声の主はスタッフで、用件はひとりで十分こと足りた。一瞬、胃のあたりがぎゅうつとしほられるような感じが走った。何があってもいいようにと、セーターとジーンズを着っぱなしで寝ていた私は、なぜかいすの上に放り出してあったマフラーをつかんで部屋を出た。アンチシンの時間の十七日、午前一時五十分すぎ。「湾岸戦争始まる」の第一報だった。

ホテルの廊下に出ると、隣からもその隣からも、間髪を入れずに、次々と各国の記者たちが飛び出して来る。ほとんど毎日顔を合わせている顔見知り同士で、皆、エレベーターを待つ間を惜しんで誰彼かまわず「知っている限りの情報」を交換する。最初に私と目が合った米・NBCのスタッフは、ひとりで「STARTED」と言っ

て肩をすくめた。

キングルームへかけつけて、電話をかけた。が、その肝心のエレベーターがいつこうにやって来る気配がない。何人かが非常口の階段に行きかけた時、一基のエレベーターの扉があいて、悠然とボーイが降りてきた。彼は突然私たちにむかって、

「アイ・アム・ハッピー」

と大声で叫んで、Vサインをつくった。殺気立っている私たちの間

始まった！ なぜかマフラーを

安藤 優子

に、一瞬、気まずい雰囲気があった。彼がバレスチナ人であることは皆知っていた。ルームサービスを運んでくる彼は、どの部屋に行ってもテレビモニターの前に長々と陣取ることでも有名だったからだ。

あまり愉快に笑えない冗談を聞かされた時の、なんとなく居心地の悪い思いで、それぞれ無言でエレベーターに乗りこんだ。中東の

複雑なからみ合いを、ほとんど表面的な「知識」としてしか理解していない私にも、「この戦争はそんな簡単なものじゃないな」と、直感的に思わせる何かが、彼のパフォーマンスにあった。

東京からは電話を通して、「緒戦、アメリカ大勝利」が逐一伝わって来た。早ければ数日で終わるかのような勢いであった。多分、もし私が東京にいたならば、この

戦争は簡単に終わると信じていただろう。けれども、そうした戦況を聞けば聞くほど、「そんな簡単には……」の思いが強くなった。

ヨルダンで親しくなった女性のニュースキャスターがいる。彼女はレバノン人を母親にもつヨルダン人で、バイタリティーにあふれるすてきな人だ。アメリカやフランスで教育を受けた彼女は、いわゆるインテリと呼ばれる言論人で

ある。

その彼女でさえも、「クウェートの正義」や、「アメリカの正義」はつゆほども認めない。彼女は私の愚問に「ヨルダンが戦場になっても私は絶対に逃げない。皆が出ていったらクウェートのようになつてしまふ」と断固として答えた。

湾岸戦争はもう三週間目。先がほの見える戦争なんてない、と今あらためて思う。

あんどろ ゆう二氏 テレビ朝日の報道番組のキャスターとして活躍後 八七年十月からフジテレビの「スーパータイム」キャスター



激しい戦闘が展開されたカブジ
攻防戦(1.31)写真 WWP

リトアニア取材

ワーキングプレス

私はこの一月、ソ連・リトアニア共和国で、ソ連軍介入をしてそれに対する市民の抵抗を間近に取材した。バルト諸国の激動はまだ続いているが、現地取材の経験を以下報告したい。

私がリトアニア共和国の首都ビリニウス入りしたのは、最初の軍事行動があった十一日の夜半過ぎだった。ソ連軍は明けて十二日も、銃が保管されている警察学校などを家宅搜索。十三日の未明には、テレビ局などを制圧にかかり、遂に市民に発砲した。

「戦車がテレビ局を撃ってる」。先に現地入りしていたモスクワ支局の布施裕之特派員の電話で起こされたのが午前一時半過ぎ。二人でホテルの外に出ると、戦車の砲声の轟音、カラシニコフ自動小銃の「カタカタカタ」という乾いた音が響いた。急いで通りがかりの市民の車を止め、テレビ塔まで乗せていってもらった。

車から飛び降りると、いきなり三十代の女性に腕をつかまれた。「コレスボンデント(記者)? カム」と私を引っ張る。騒然とした

人込みの中にわけ入ると、男の死体が横たわっていた。「キルド、ソウ、キルド(二人殺された)」と、だれかが英語で私に叫んだ。惨劇が起こったことは、この後世界中に報じられた通りだ。

ここで記したいのは、私の腕をとった女性に限らず、リトアニア人が私たちの取材に全面協力してくれたことだ。「この惨劇を世界に伝えて欲しい」。ソ連軍の圧倒的

この惨劇を世界に伝えて

な力の前に丸裸の市民たちにとって、外人記者は助っ人に映っていた。

現場の協力だけではない。取材でホテルに帰ったのが遅くなり、食事を逃したことがあった。「何も食べられないのか」と恨めしそうにレセプションの女性に言う。と、彼女は肩をすくめた。この時近くにいた男性がリトアニア語で「日本の記者が頑張っているんだ

ぞ」というようなことを言ってくれた(らしい)。顔色を変えた女性性は私たちに向かって「お茶とパシしかありません、それでよかったです」と申し出た。出てきたお茶は熱くておいしかった。

滞在が長くなって、リトアニア人記者に顔が知れるようになる。と、新聞やテレビに逆に取材を受けることもあった。ある時「リトアニア人はとても協力的だ」と言

伊 熊 幹 雄

うと、「それはみなさんの報道がリトアニアを新たな惨劇から救っているからです」と答えが返ってきて、私もジーンとした。

もっとも協力的だからといって、リトアニア人がすべて正しいと決め付けるわけにはいかない。「中央通信局も占拠された」と教えられ、駆け付けると何もなかった、というようなことは少なくない。共和国政府は毎日二回、ブリ

ーフィングを行ったが、「未確認情報」も多かった。こういう時は、自分で現場に行く以外にない。

不思議に思うのは、リトアニア滞在中にソ連当局の取材妨害や退去命令がなかったことだ。ビザ発給も早かった。市民への発砲直後には「追い出されるかな」と思ったが、軍の無差別検問などは別にして、その後も取材妨害はなかった。クレムリン権力内部にもリトアニア人と同じように「これを世界に伝えて」と願う勢力がいるのだろうか。



米ソ関係にも影を落とした「血の日曜日」
(1-13) 写真 WWP

いくま みきお氏 一九八〇年読売新聞
入社 八九年からワルシャワ特派員

経団連会長交代

ワーキングプレス

財界記者クラブは常勤記者がわずかに十五人の小所帯で、取材するのは経団連、日商、日経連、経済同友会の経済四団体のトップだ。

財界トップの発言は、財政、金融、農政などの国内政策全般から通商や外交など対外政策、それに内外の政治問題まで広範にわたる。しかも、その発言ばかりか、内外の懸案について各団体が競ってまとめる提言も、政府・自民党の政策に大きな影響を与える。だから記者一人の仕事量は、数十人の常勤記者を抱える大蔵省、通産省、日銀の記者クラブと比較しても遜色はない。時には一人ではカバーしきれないこともある。

特に、昨年は人事の当たり年で、その取材も重なり、例年になく忙しい一年だった。四団体のトップのうち、石川六郎日商會頭以外の三人の交代人事の取材があり、こうしたことは過去例がないという。

財界首脳は日本の経済界のリーダーで、だれがトップに座るかが日本の進路にも少なからず影響を与える。だから、トップ人事があ

るとなれば、取材競争にも熱が入る。特に、経団連には「財界総本山」という枕言葉がつき、その会長は財界総理と呼ばれる。日本の民間経済界の顔であり、経団連会長が交代するとなれば、財界記者も色めき立つ。

昨年は暮れに、その経団連会長の交代があった。第六代経団連会長の斎藤英四郎新日鉄名誉会長が十二月二十一日の臨時総会で勇

春まで続く人事取材合戦

大塚 将 司

退、筆頭副会長の平岩外四東京電力会長が第七代会長に就いたのだ。

斎藤氏が同じ新日鉄出身の稲山嘉寛氏(故人)の後を継いで会長に就任したのは、昭和六十一年五月だ。経団連会長は過去、三代続い

て三期六年務めており、斎藤氏もそれに習えば、交代時期は来年五月になる。ところが、就任当初から二期四年で勇退し、筆頭副会長

の平岩氏に会長ポストを禅譲するのではないかとの見方がくすぶる。一昨年末から、斎藤氏の去就にマスコミの関心が集まった。

実際、斎藤氏は一昨年末に平岩氏に会い、禅譲の意向を伝えたという。しかしその後、斎藤会長の三選報道が相次ぐ中、斎藤会長の人格を汚すような雑誌記事が載る一方で、平岩氏も会長ポストに強い意欲を示し、放置すれば経団連

会長ポストを巡る泥仕合に発展する恐れも出てきた。このため、ある財界人が二人の間に入り、経団連の組織と権威を守るために、取り合えず斎藤会長の三選で合意を取り付け、財界記者の関心も遠のくに見えた。

しかし、そうなればそうなったで、「斎藤会長が三期六年やるはずはない。途中で交代するはずだ」というのが大方の見方で、途中



就任のあいさつをする平岩氏(12.21)写真 時事

交代の時期を採る取材合戦が密かに進行した。経済部総動員で取材に当たったところもあるようだ。トップ人事は経団連だけではな

かった。鈴木永二日経連会長も二期四年になる今年五月の勇退を念頭に、昨年五月の総会で後任会長含みの副会長として永野健三三菱マテリアル会長に白羽の矢をたてたが、この人事でも水面下で激しい取材合戦が繰り広げられた。さらに、今年四月には石原俊経済同友会代表幹事が三期六年で勇退する意向で、今年春まで財界記者の忙しい日々が続く。

おつか しょうじ氏 一九七五年日本経済新聞入社 日銀 通産 大蔵のクラブを経て 九〇年から財界記者クラブ

9日間の宇宙出張

ワーキングプレス

昨年十二月十日、アルカリクの帰還予定地に着地した後、星の街でのリハビリ中の楽しみの一つは、九日間の宇宙出張について、日本のマスコミがどのように報じたのかをフォローすることでした。

新聞の論調が、TBSのプロジェクトについておおむね好意的だったことは、一般的空気が事前の盛り上がりにかけていただけに、正直言って意外でした。

視聴率面で、打ち上げ時の「瞬間風速」が、三六%を記録したことは予想外でしたし、連日の夕方七時台の帯が平均二〇%だったことも「へえ」という感じでした。

宇宙へ日本人を送り出すというプロジェクトが、いったいどのくらいインパクトを人々に与え、興奮を呼び起こすか、正確な読みは、スタッフも私自身も、事前にできていませんでした。

視聴者からのたくさんの手紙(約五百通)が、何故あしたの数字になったのかを考えるヒントを与えてくれるような気がします。

「宇宙旅行について知るきっかけ

けになった」という子供。「宇宙への夢と希望を与えてくれた」という子供。「宇宙が身近になった」というお母さん達。

私自身、このプロジェクトについて、「日本語で宇宙からリポートする」点に意味があることは承知していたものの、宇宙についての「知識」や「宇宙旅行」についての情報は、満ち満ちているというような気がしていました。

国内と異なる海外の反響

秋山 豊 寛

という気がするのです。

つまり、この人達の多くにとっては、ロケットの打ち上げから帰還までのトータルなドラマと、情報をまとめて与えられたのは、実は今回が初めてだったのです。

そう知ってしまったら、子供達の興奮ぶりがよく分かります。ソニーズという、いかにも元祖ロケットという形のロケットが砂漠の中に立ち、白煙を上げて上昇し、船内

の無重量状態がテレビ画面を通じて伝わり、大気圏への再突入が、興奮した記者のリポートとともに生中継で報じられる。この一連のテレビ中継は、確かにたくさんの子供達にインパクトを与えるにたる十分なイベントだったのです。

日本の各種報道機関が、一九九〇年の十大ニュースの中に入れたのも、納得できることでした。

こうした国内の反響とは違っ

て、海外の反響が冷たく、時にいじわるな眼を見せたのも、また当然のことだったかもしれません。

宇宙に行くことなど、欧米人には、何も珍しいことではありません。しかし、彼らにとっても目新しいことはあったはずで、それは、フツのオジサンが宇宙に行ったということです。

この点についてニューヨーク・タイムスは、「アンチ・ヒーロー」つまり「英雄らしからぬ主人公」という表現で、このフツのオジサンの「ドタバタ」ぶりを報じていました。宇宙に行くのは「ライオスタッフ」つまり「正しい資質の人だけ」という、これまでの常識とは異なる「オジサン」がなんとか行ってきたわけです。

私は、ニューヨーク・タイムスが「アンチ・ヒーロー」という見出しを掲げてくれたことを大変うれしく感じています。

アンチ・ヒーローなればこそ、子供達が興奮しただけでなく、喜んでくれたのだと思っています。

あきやま とよのり氏 一九六六年東京放送入社 報道特集ディレクター ワシントン特派員を経て 現在 報道総局次長

連載35



＝スペイン＝

湾岸戦争で放送事情が一変

江口 義孝

一九七五年、フランコ總統死去。
 スペインにとって市民戦争の後、言論の自由、ひいては民主主義が復活したのは、この年からである。つまり、テレビにとっても新聞にとっても、それ自身の歴史はあっても、ちゃんとした報道を再開したのは、この十五年間だということになる。独裁下では、国営のテレビ局のお仕着せの番組と政府支持の記事か、批判のない検閲を経た記事しか登場しないのは、いつでもどこでも同じことである。つまりこの十五年間は、政府・言論報道界双方にとって民主化への道程そのものであった。テレビ界を例にとってみる

と、かつては国営のスペインテレビの独壇場だった勢力地図も、ここバルセロナだけを見ても、ケーブル局を含めて民間の放送局が六局もある。そのほとんどは、この数年に誕生したものである。放送局としての実績は、極めて短い。

私が初めてバルセロナを訪れた二年前、テレビのスイッチを入れると、そこから出てくるのは、安易なスタジオショーであり、アメリカ製のソープドラマの吹き替えが主流であった。朝のニュースは見当たらず、お昼の十二時と確か夜の九時にその日のまとめをやっていたようだ。それも十五分とか、二十分程度であったように思う。

ところが、去年の暮れに赴任してみて驚いたのは、各局とも朝・昼・夜のニュースに力を入れ始めたことだ。その傾向は、国営よりも民間放送の方が顕著である。しかし、昼と夜のニュースはともかく、重要な朝の時間の十分とか十五分間のは、私だけではなかったはずだと思う。はつきり言って、朝の時間帯に長いニュースを放送する必要性を、スペインの人々はあまり感じていなかったに違いないし、そうした番組を組む態勢も放送局としての力も、十分ではなかったと思う。

こうしたスペインの放送事情が一変さ

せたのは、一月十七日にほつ発した湾岸戦争である。それ以降複数のテレビ局は、連日一時間の戦争特集番組を組んで放送している。毎朝一時間の特集を、どこかのテレビ局で見ることができると、多国籍軍の攻撃が始まったあと、定時放送終了後、ある放送局はCNNを同時通訳付きで明け方まで流し続けた。

毎日、番組と番組の間に「湾岸戦争最新ニュース・コーナー」が設けられて、いわゆる外信部の仕事部屋に設けられた仮設のスタジオから、最新情報がきめ細かく伝えられる。ラジオも一時間ごとにな湾岸戦争関係のニュースを流すようになった。要するにスペインのテレビ界にとって初めてのことが、次々に実施されているのである。

湾岸情勢にスペインが大きな関心を寄せるのは、ただ単に地理的に近いという理由だけではないのは明らかだ。

スペインはもちろん参戦国で、ベルシヤ湾と紅海にフリゲート艦とコルベット艦合わせて三隻を派遣している。また、実戦への参加は伝えられていないけれども、戦闘機の支援派遣も決定している。かなり前に水兵と家族が港で抱き合つて別れを惜しむシーンが、カラー写真で新聞の一面トップに、派手に載っていたのを思い出す。戦争論議も盛んで、石油の恩恵を受け、自由主義陣営の一員であり

ながら、日本が参戦しないのはおかしい納得がいかない、という質問を受けて、憲法規定と国会での論議を説明したことも一度ならずあった。

戦争の行方は、一応後方支援という条件で参戦しているスペインの立場にも、今後変化を起こせることも考えられる。バルシヤ湾と紅海で軍艦の船上にいる兵士の家族はもとより、政府も市民も文字どおり日々刻々と伝えられるこの戦争のニュースに、最大の関心を注いでいるのは言うまでもないことである。

そして、スペインのテレビ局は、そうした要請に対して開局以来の態勢で臨んでいるという。二十四時間の放送態勢、現地への特派員の増員、外国の放送局との提携など、これを契機に本格的な報道番組作りのできる放送局へと、いま変身しているところである。

えくち よしたか氏 一九七四年NHK入局
 外信部記者 リオデジャネイロ支局長を経て
 スポーツ報道センター 九〇年からバルセロナ支局長

TV E・スペイン国営放送が二つのチャンネルを持つ。他に、各地方ごとに民間放送局があり、ネットワーク化されているが、その力はまだまだ。バルセロナでは、アンテナ3が有力である。
 衛星用のアンテナをとりつけると、英、独、仏、伊の番組も視聴できる。

ク ラ ブ ゲ ス ト

「91年経済見通し」

新年恒例の「経済見通し」研究会が行われた。いずれも「1・17」前。四人の講師とも湾岸情勢を横目でにらみ、経済への影響を危くしながらも、「平和解決」を希望しての話だった。

鈴木 淑夫 野村総合研究所副理事長

「日本経済は、減速すれども後退せず。それには経済成長が巡航速度まで落ちることが条件。カギを握るのは湾岸情勢と金融政策の行方」と言う。

「湾岸での軍事衝突がなく、原油価格が20ドル前後なら、物価は下がり、やがて金融緩和への動きも見えてくる」というのが基本シナリオ。

問題は、金利低下による景気の再加熱とホームメード・インフレ。「1・17」三月が、マクロ経済運営にとつての正念場となる。

懸念される米国のリセッションは小さく短い、現在の日本の好況は内需中心であり、米国経済からの影響は少ない、とみる。



1月7日(月)
司会 鈴木幸夫委員
出席 139人

金森 久雄 日本経済研究センター会長

いつも強気の見通しで鳴らす金森氏だが、「今年は景気調整の年」と珍しく(?)慎重だった。このため、金融機関・研究機関による九一年の経済見通しの中でも、同センターの経済成長率二・九％は最も低かった。

しかし、「調整は短く、浅い。上りエスカレーターの中で足踏みしているようなもので、回復は早い」と。設備投資、住宅投資、輸出の低下などがマイナス要因になるが、「大型の景気余熱があり、実体経済はまだかなり強い。消費、公共投資が下支えとなる。停滞は夏からだろう」と予測する。

日本経済では一服論を示したが、お得意のソ連経済については楽観視した。「困難は過渡的なもので、ゆっくりに時間をかければ成功する。いまは緊急援助と、インフラ整備のための長期援助の双方が必要」と話し、ゴルバチョフ大統領にエールを送る。

記念署名は、「成長必勝」だった。



1月7日(月)
司会 藤原作弥委員
出席 130人

齋藤 健 富士総合研究所専務取締役

このシリーズ初登場。米国の経済を中心にバランスの取れた見通しを述べた。「米国の景気後退は明らかだが、それは循環的な要因ではなく、構造的な弱い弱性起因したもの。国も企業も個人も、債務に依存して景気拡大をはかってきたツケがまわってきた」。

リセッションは浅くて短い、とする米エコノミストの意見を紹介し、「リセッションの定義にもよるが、確かに深くはないにしても、すぐに浮上するかどうかは疑問」と言う。

不動産不況と株の下落による金融機関の経営悪化が目立つが、銀行はすでに整理されており、また、預金保険制度もあり、「金融恐慌があるとは思わない。しかし双子の赤字に対する有効な対策もなく、米国経済のぜい弱性はなかなか直らない」。

一方、「日本経済は春に景気の転換点を迎えるが、それは循環性のものであり、一年から一年半程度で回復に向かうだろう」。



1月9日(水)
司会 小林光治委員
出席 108人

宮崎 勇 大和総研理事長

「悲観も楽観もしていない。いつも希望を持っている」。この日湾岸危機調停が不調に終わったデクニヤル国連事務総長の言葉を引用し、「日本経済について同じ気持ち」と。

今年の問題点として労働力不足、中東と石油、米国経済の三つをあげたが、「一番気がかりなのは、米国の景気後退。大きな要因となるので、早く回復してほしい」と述べた。

設備投資については「九〇年度と比べ半減するが、腰は強い。生産力拡充投資は全体の三割程度。これは鈍化するが、残りの合理化や研究開発型投資はやめるわけにいかない」。

「いざなぎ」を超えるかどうかには興味がないと述べ、「あえて聞かれれば、並ぶと答える。しかし、構造調整が世界的に進んでいる中で、景気拡大であり、神話から命名したような国内的な景気の長さだけを取り上げても意味がない。従来の景気循環のセオリーでは説明できなくなっている」と。



1月14日(月)
司会 広瀬一郎委員
出席 115人

ク ラ ブ ゲ ス ト

齋藤 六郎 全国抑留者補償協議
会会長



1.8 (火) 研究会
「ソ連・東欧」(26)
司会 江口浩委員
出席 61人

「敗戦後、地面にはいつくばって、シベリア抑留問題に取り組んできた」その交渉がやっと実を結び、九〇年十二月五日、全抑協とソ日相互理解協議会(キリチェンコ議長)との間で、日ソ相互信頼協定が締結され、タイシエト地区抑留死亡者の第一次名簿(千四百四十四人)が引き渡された。

第二次名簿の引き渡しが、一月十一日にも行われることになっていたが、「昨日、キリチェンコ議長から電話が入り、ゴルバチョフ大統領訪日まで我慢してくれと言われた」。「外務省の横やりとは受け取っていない。今後は国と国のレベルで、この問題が正しく処理されていくよう見守りたい」。

昭和二十年八月ソ連の捕虜となり、バム鉄道工事に従事した時の自分の苦勞も語ったが、戦後世代にとっては、「生き地獄」の話ばかり。この時の体験が、抑留者の補償などに奔走する引き金となったようだ。

ジャムジューム サウジアラビア
友好使節団团长

壇上には、团长以下六人が並び、最初にシヨボクシ駐日大使が英語で、「現在の不幸な事態に対しては、イラクの大統領・政府のみが責任を負うべきである」とステートメントを読みあげた。

質疑応答の中で、ジャムジューム团长は、「このミッシェンの目的は、湾岸情勢の実情説明と多国籍軍への支援要請で、世界二十二か国に派遣されている。多国籍軍経費の四〇〜四五％をサウジ一国で負担しているが、経済大国・日本には応分の援助をお願いしたい。今のところ、日本は遠慮しすぎているようだ」と。

「使用言語 アラビア語・日本語」の約束にもかかわらず、本国から送られてきた大使の声明が英語だったこともあってか、英語でのやりとりが飛び交う場面も。その意味ではヒヤヒヤものだったが、国際派の司会者の絶妙なアシストを得て、何とか乗りきった会見だった。



1.21 (月) 記者会見
司会 石川莊太郎委員
通訳 林 昂
出席 81人

堀内 司朗 松下電器取締役半導
体研究センター所長



1.23 (水) 研究会
「新しい科学と技術」
(10)
司会 村野賢哉委員
出席 50人

「産業のコメ」と言われる半導体について、種類、製造方法や今後の開発見通しを、分かりやすく説明した。

わが国の半導体技術は、電卓の生産によって飛躍的に進み、各社は相次いで十六メガDRAMのサンプル出荷を発表し、九二年の量産化への道を削っている。しかし、今やこれまで以上にクリーンルームをはじめ、設備投資に巨額の資金が必要な時代となった。

米国では、すでに六四キロビット時代に、一社を残しメモリー産業から撤退している。しかし、日本でも六四メガ時代になると、一つの生産ラインだけで一兆円にもなる。今後は日本でも淘汰が進むだろう。また、半導体の生産技術では日本がトップだが、「ソフト」の分野ではやはり米国がリードしている、とも。

「メモリー競争のゴール」については「現在の技術では、経済性を考えると二五メガが限界。それ以上のも

のは作ってもあまり意味がないのでは」。

ビタリー・コロティッチ『アガニ
ョーク』誌編集長

急進改革派の代表的なジャーナリストであり、人民代議員大会の代議員でもある。ラトビアの首都リガで武力介入があった直後でもあり、保守派の核となつている「軍産複合体」を厳しく批判した。

「軍産複合体が手のつけられないほど強大なものになっている。軍は敵を国内で捜している」「リベラルな考え方が激しく攻撃され、民主主義を志向する新聞とテレビがカットアウトされている」等々。そして、「もし、ゴルバチョフが辞任すれば非常に保守的な人物が出てくるだろう」と。

しかし、ゴルバチョフについては、「バランスをとりながら保守派が権力を握ることのないように手を打つと信じている」と述べ、保守派に「人質」として取られた新たな状況のもとでも「新しいゴルバチョフ」を支持してい



1.23 (水) 記者会見
司会 下村満子委員
通訳 福島安紀子
出席 111人

ク ラ ブ ゲ ス ト



1.25 (金) 昼食会
司会 藤川魏也委員
出席 44人

く姿勢を示した。そして、民主化のプロセスはかなり進んできており、「半分妊娠する」というのは不可能として、ペレストロイカの先行きにも楽観的な見通しを示した。

鈴木 良一 警察庁長官

昨年十二月に就任した新長官の昼食会第一声は、「九〇年は即位の礼や大嘗祭などがあり、薄氷を踏む思いだった」。次いで「今年は、立太子礼のほかゴルバチョフやブッシュの来日も予定されており、成田や関西空港でのゲリラ対策もヤマになる」。手綱を緩めるような状況ではない、という。

「心配のタネ」として、暴力団、コカインをはじめとする薬物、極左過激派によるゲリラ、外国人の犯罪、交通事故の増加などをあげた。特に暴力団については「存在自体にメスを入れるべく、現在、有識者を集めて法規制できないか検討中。まとまれば今国会にも提出したい」と。

一方、湾岸戦争はついに伴い、「国際テロにも十分注意していかなくては

ならない。VIP、大使館のほか、米軍基地、自衛隊施設などにも目を光らせなければ……」。表情が一段とひきしまった。

レナト・コンスタンティノ
コラムニスト

1.25 (金) 囲碁会
司会 江口浩真委員
出席 27人

歴史学者でフィリピン・デイリー・グローブ紙のコラムニスト。近著『第二の侵略』では、東南アジアへの日本の経済進出を厳しく告発する。

湾岸戦争にも「米国は国連決議を強引に成立させ、中東での支配的プレゼンスを確立し、石油をコントロールしようとしている」と、これまた激しい対米非難。自衛隊機の派遣問題にも懸念を示す。「アジア諸国は日本の軍国主義の復活を恐れている」「日本は対米関係を再考し、東南アジアにおける侵略を反省して、対アジア関係を再検討すべきだ」。

フィリピン人特派員の、「比日関係を第二次大戦から話し始めるかぎりには、対等な会話ができないのでは？」との反論にも、「日本の軍事支出が世

界第三位となつたいま、どうしても過去のイメージがぬぐいきれない」と答えた。

平岩 外四 経団連会長

開口一番、「親父は夢を持って外四とつけたのでしようが、自分では員数外の四番目と思っている」と。ゴルフ場で「平岩ほか四名」と誤解されたことなど、名前にまつわるエピソードをまず披露。自然体である。会長就任時の新聞の紹介記事によれば、中国『書経』の「四門を開き、外に四目を明らかにして、四聰を達せしむ」から外四と名づけられたという。

湾岸戦争、ソ連、ウルグアイ・ラウンド、地球環境問題などについて「財界総理」として考えを述べたが、対ソ経済協力については「ソ連の情勢が変化している。政経不可分の原則に戻って考えざるを得ないだろう」として、これまでの積極路線を軌道修正した。記念署名は「志と心」。「経営者は大いなる志が必要だが、同時に自由競争の中で必ず出てくる弱者への心配りを忘れてはいけない」と説明した。



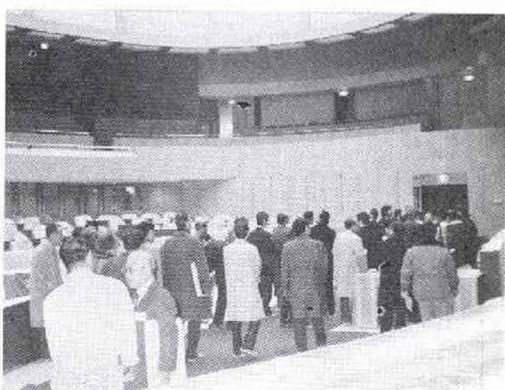
1.28 (月) 昼食会
司会 広瀬一郎委員
出席 112人

都庁新庁舎見学会

定員五十人に百四十九人が応募、このため吉沢正也会員に立ち会ってもらい、抽選会を実施。狭き門を通り抜けた選拔メンバーが、一月二十八日(月)の午前、四月一日にオープンする東京都庁新庁舎を見学した。

東京都側から事前説明を受けたのちまは四十五階の展望室へ。好天に恵まれたせいか富士山もハッキリ見え、「東京の新名所になる」との説明にも説得力があった。もちろん無料。

移転を直前にして、各種の工事や搬入作業が慌ただしく進められる中、第一本庁舎、第二本庁舎、議会議棟を駆け足で回ったが、話題(?)の知事執務室に対しては、「意外に狭いネ」との声も。



これまでの1.5倍の広さになった本会議場

■会議報告■

第185回企画委員会

(1・11 宴会場)

ブッシュ、ゴルバチョフ両大統領の記者会見に関しては、小委員会を作って対応することにしたほか、一月、二月のゲストについて協議した。

出席 平野委員長。石川、広瀬、江口、

藤原、田畑、川内、宮智、樫田、

酒井、村野、鈴木、渡辺、マツジ

の各委員。

第118回会報委員会

(1・14 第1会議室)

「会報アンケート」の結果に関して中間報告したほか、二月号の編集について協議した。

出席 深川委員長。池浦、今城、林、出

田の各委員。

第10回会員資格委員会

(1・17 小会議室)

二月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 播谷、斎藤、村瀬の各委員。

第75回施設運営委員会

(1・30 第2会議室)

十一、十二月の借室状況やアラスカ売り上げについて事務局から報告した。

出席 石川委員長。永森、和田、小松

原、宮地、樋口、上田の各委員。

招待券

朝日新聞社から「堀文子展」、大丸ミュージアム

から「日本盆栽作風展」の招待券を二恵贈いただきました。お礼申しあげます。

寄贈書

戦争と社会部記者

朝日旧友会

新しい広告評価基準を求めて

日本新聞協会

日本民間放送年鑑90 日本民間放送連盟

冷戦後の世界と日本

フォーリン・プレスセンター

外交に勝利はない

三宅和助

THE WORLD ALMANAC 1991

米国大使館

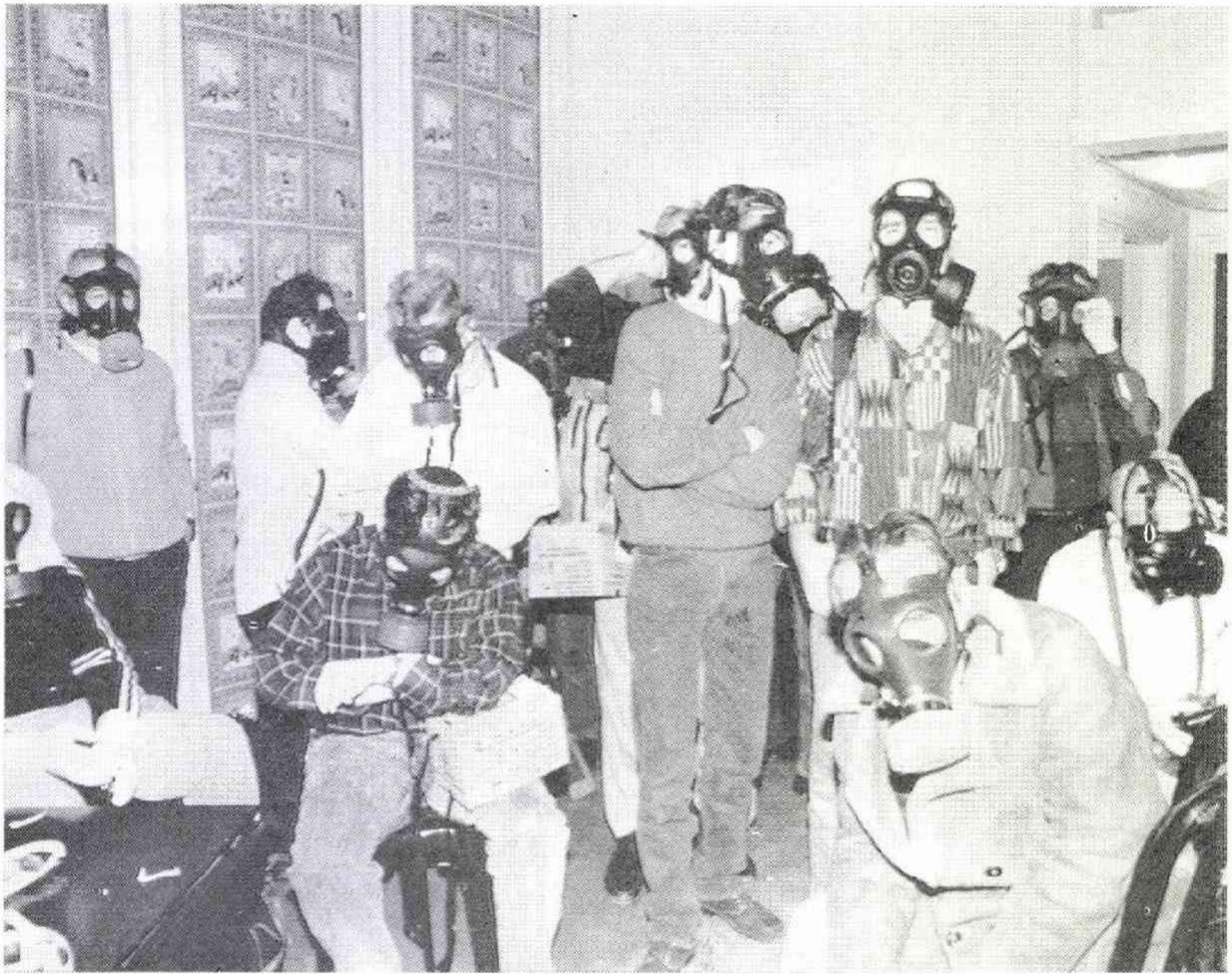
プロフィール

◇個人D会員

写真回廊

写真 水野 正矩

(1965年読売新聞入社 北陸支社 静岡支局を経て)
東京本社写真部 昨年11月から中東各地で取材中



(エルサレムのキング・デビッドホテル 1.18)

戦争

空襲警報も防空ごうも知っている。爆弾の響きも、えい光弾も、防毒面のゴムの臭いも、みんな覚えていて。ハイテク戦争というが、受け身の庶民に、戦争はなにも変わらない。

ボーダーレスの時代だと言っていた。ほんとに、そうか。戦争は人の心の中で生まれるというユネスコ憲章にならえば、国境は人の心の中に引かれている。

気がめいって、景気のいい音楽を聴きたくなり、当代テノールの例のCDをかけた。パバロッティとドミンゴとカレラスが、去年のワールド・カップ・サッカー決勝戦の前夜祭に、ローマのカラカラ浴場で歌った、あれだ。歌合戦よろしく、愛よ、君のひとみよ、太陽よ、と声をはり上げる。手放しの明るさだ。

翌日の決勝戦は、西ドイツがアルゼンチンを下し、統一目前の両ドイツは狂喜した。一カ月間の大会をテレビで見た人は、世界で延べ二九五億人という。

イラクがクウェートに攻め込んだのは、その一カ月後だった。サッカーに興じた何億のひとみは、いま、戦争を見つめているだろう。

統一、統合、民主化、共通の家。人びとが行くために希望を見ていた束の間の時は、あの夏で終わったかもしれない。(酒井 寛)

「福引」景品提供社

左記の会員社から、新年互礼会の「福引」用景品を
ご惠贈いただきました。お礼申しあげます。

朝日新聞社 毎日新聞社 読売新聞社 日本経済新聞
社 産経新聞社 ジャパンタイムズ 日刊工業新聞社
日刊スポーツ新聞社 日本工業新聞社 東京スポーツ
新聞社 日本海新聞社 水産経済新聞社 東京ニ
ース通信社 日本農業新聞 共同通信社 時事通信社
北海道新聞社 東奥日報社 デーリー東北新聞社 岩
手日報社 河北新報社 秋田魁新報社 山形新聞社
福島民報社 茨城新聞社 常陽新聞社 栃木新聞社
千葉日報社 山梨日日新聞社 信濃毎日新聞社 中日
新聞社 新潟日報社 京都新聞社 神戸新聞社 デイ
リースポーツ社 奈良新聞社 山陽新聞社 中国新聞
社 山陰中央新報社 徳島新聞社 四国新聞社 愛媛
新聞社 高知新聞社 西日本新聞社 大分合同新聞社
南日本新聞社 沖縄タイムス社 琉球新報社 日本
新聞協会 日本プレスセンター 日本放送協会 東京

ブリッジ講習会のお知らせ

日本ブリッジ連盟の協力でコントラクトブリ
ッジの講習会を行います。初めての方を対象に、ル
ール説明の後、ゲームを楽しんでいただきます。
参加ご希望の方は事務局へお申し込みくださ
い。なお、ビジターを一人同伴いただいで結
構です。ふるってご参加ください。
日時 三月九日(土)午後一時三〇分～四時三〇分
場所 クラブ大会議室

放送 文化放送 日本テレビ放送網 日本短波放送
全国朝日放送 フジテレビジョン テレビ東京 エフ
エム東京 エフエムジャパン 日本衛星放送 毎日放
送 朝日放送 大阪放送 読売テレビ放送 北海道放
送 北海道テレビ放送 東北放送 秋田テレビ 福島
テレビ 栃木放送 テレビ神奈川 新潟放送 中部日
本放送 東海テレビ放送 東海ラジオ放送 KBS京
都 和歌山放送 中国放送 南日本放送 日経映像
日本民間放送連盟 アラスカ 朝日広告社 第一企画
電通 電通バーソン・マーステラ 電通PRセンター
エッソ石油 ゼネラル石油 放送文化基金 国際電
信電話 三菱商事 NHKサービスセンター 日本A
BC協会 日本AT&T 日本電気ホームエレクトロ
ニクス 日本電気協会 日本航空 日本コンベンショ
ンサービス 日本新聞インキ ニッカウケスキー 日
商岩井 サントリー 帝国 帝国ホテル 安田火災海
上保険 全国農業協同組合中央会 (会員名簿順)

会員の著書(ご惠贈いただきました)

馬占山將軍伝 立花丈平
バックホーム 仲 晃訳
ドイツ民族を知らない21世紀は語れない 足立邦夫
放送概論 片岡俊夫

お得な喫茶券をご利用ください

九階ラウンジのレジで、喫茶券を発売してありま
す。一冊二十枚つづりで二、七〇〇円。コーヒー、紅
茶、ジュースなどが二杯分お得になっています。
昼食時のラウンジは特に混雑します。小銭のわずら
わしさやおつりでイライラ、などということがなくな
ればと思っています。ぜひご利用ください。

計報 斎藤吉史会員(個人D)が一月十二日すい臓
がんのため、上野英夫会員(個人D)が同二十日心不
全のため逝去されました。謹んで両会員のご冥福をお
祈りいたします。

会員現況 法人会員 一五〇社 基本会員 六五九人
個人会員 一、六七三人 法人・個人賛助会員 七三
社 二七三人 特別賛助会員 七二人 名誉会員 一
三人 計 二二三社 二、六五四人

二月の行事(7日現在)

13日(水) 午後3時～4時 チャモロ ニカラグ
ア大統領記者会見
19日(火) 午後2時～3時30分 ネーメト前ハン
ガリー首相記者会見
28日(木) 正午～午後2時 鈴木永二日経連会長
昼食会
午後2時30分～3時30分 フロロフ
プラウダ編集長記者会見
〔行事案内電話 三五〇三一二七六四〕

会報委員長 深川 誠

委員 池浦正彦 出田 裕 今城力夫 林 利隆
連絡 長谷川 河野(事務局三五〇三一二七二二)